

コメント…「靖国」や「戦争」を直接に語らず、「死者の記憶」を語ること

見城 悌治

「死者の記憶」というシンポジウムテーマの下、佐藤弘夫氏および羽賀祥二氏が行った報告は、それぞれの長年にわたる蓄積を基にした刺激的な議論を拝聴することができた。

佐藤氏の報告は、古代から近代までのきわめて長いスパンにおいて、またヨーロッパとの比較も視野に入れ、「ヤスクニの思想」についての持論を展開された。時間的空間的に広く深く問題を捉えようとする視座は、学ぶところばかりであったが、筆者の力量から、幕末から近代をめぐる議論に絞り、理解しにくかった点をいくつか指摘していきたい。

まず、佐藤氏は「鯨絵のコスモロジー」と題した第三

節において、安政大地震を背景に現れた「鯨絵」が「破壊者」と「救済主」を同時に示すと解釈できる事をもつて、それが既存の支配秩序や身分制を桎梏と感じる意識の反映であり、「新たな人間観の定着」であったと捉えようとする。この解釈は、周知の議論でもあり、首肯できる部分も多いが、それを「平準化への要求」にまで結ぼうとすると、やや違和感が残った。

すなわち、この論点を別の角度から眺めると、幕末の社会的思想的変動こそが、「新しい人間観」創出に、より根源的な意味を持つとも言え、とすれば、「鯨」＝地震の役割は後景に退き、単なるきっかけ程度の位置づけにしかにならないように思える。すなわち、（羽賀報告の

論点にも関わることはあるが、幕末期の大量の「死者」が持った意味をどのように位置づけようとしているのかは、見えにくかった。

おそらくこの議論は、幕末に浮上してきた「ヒトガミ」観念にみられる水平志向と「記憶」に対する社会的願望をいかに掬い取るか」という佐藤氏自身が設定した課題を、第四節の「招魂社の創出」に繋げるために用意されていたと考えられる。すなわち、「天皇のために生命を捧げる」という観念の生成が、「国民国家」への急速な移行を可能にした」と、佐藤氏が述べる箇所との連関である。

確かに、国に命を捧げる行為が、「身分」を越えた神への上昇を保証するものとなるならば、その意識形成が「国民国家」生成に貢献した側面もあるだろう。ただ、その移行は、本当に「急速」に為し遂げられたと言えるのだろうか。たとえば、佐藤氏も言及している「民衆宗教の淫祠邪教視」との関係である。周知の通り、金光教や天理教の「公認」は、二〇世紀に入ってからであり、少なくとも維新後三十数年は、葛藤が続いた事になる。

また、一般論ではあるが、日清日露の対外戦争が、民衆宗教やキリスト教の国家（戦争）協力を引き出したことを含めて、「国民国家」への脱皮を促したと考える方が

筆者にとっては、得心がいく説明となる。やはり、「ヤスクニ」あるいは天皇と、民衆宗教等の「カミ」の間には、様々な葛藤や軋轢があったはずで、その解消＝靖国への一元化は、必ずしも容易ではなかったと考えるのだが、そのあたりはいかがであらうか。

一方、羽賀氏の報告は、佐藤氏と対照的に、扱う時代を主に一八九〇年代に絞り、当該期における多様な追悼の形（様々な死因の存在、また追悼する宗教の多様性）を具体的に紹介し、新たな歴史像を明示されたため、多くの知見を得ることができた。しかしながら、新しい視点であるがゆえに、不明な点がいくつか残った。たとえば、羽賀氏は、冒頭で「公共的な意味をもった死者」という概念を呈し、「天災」や伝染病の死者をもそのカテゴリーに入れて行こうとする。しかし、その文言を見た筆者が最初に想起したのは、まずは戦死者である。「非命の大量死」という意味合いならば了解する部分もあるが、それらすべてをまとめ、「公共的な死」の語で括ることの積極的意味合いは理解しにくかった。林淳氏が、シンポジウム全体の趣旨を語るなかで、「社会的な死」という文言を用いていたが、それと同義なのか、あるいは別個の意味を持つのか。今回のシンポの核心に迫る問題であるがゆえに、もう少し議論を深めて欲しかったところであ

ある。

一方、この問題との関連で、羽賀氏は「罹災共同体」という新たな概念も提起している。これは十八世紀末に起源を持つとされたが、報告でスポットを当てた一八九〇年代は、日清戦争という大戦争があったがゆえ、靖国がその存在意義を漸次固めて行く時期でもあったと考えられる。となると、複数の原因からなる死者を一緒に（同列に）追悼しようとする「罹災協同体」と靖国神社の関係性はどうなっていくのか。靖国の存在が拡大することにより、次第に解体していくと見るのか、あるいは「共同体の意思」を背景にしている以上、「本流」か「伏流」かは別にして、共同体内で明確な役割を担い続けるとお考えなのか。また、この一八九〇年代を「大量死の時代」の端緒と位置付けて、一つのモデルケースのように考えた場合、その後の歴史過程において、日露戦争から続く対外戦争、また関東大震災、太平洋戦争下の空襲等が進行していく事は、モデルケースが量的に増加したものに過ぎないと見るのか。あるいは、たとえば太平洋戦争下で、質的に変化していかざるを得ないと見るのか。

この「罹災共同体」の起源については、幕府が命じて「施餓鬼会」を実施した一八世紀末にあると説明されるのだが、そうすると「共同体の意思」というよりは、権

力によって創出されたという解釈も成り立ち得る。それに対し、近代における「罹災共同体」は、「下からの創出力」を独自に育んでいたと見るのか。とすれば、近世のそれを「起源」としてしまうのは、適切ではないように思われるがどうか。

さらにまた、「罹災共同体」の存在は、共同体の維持発展に尽力した「功労者」に対する顕彰システムの一環であったと位置付ける。しかし、近世において、天災や流行り病で死した人を「功労者」と見て、そこに「公共的価値」を付与しようするという観点は、率直に言って筆者には理解しにくかった事も付言しておきたい。

佐藤氏、羽賀氏の報告は、ともに、「死者」については語りながら、主テーマ（あるいは隠れテーマ）である「ヤスクニ／靖国」について多くを語らず、また「大量死」の典型たる「戦争」についての言及もあまりないというユニークな編制をとっていた。斯界を牽引してきた第一人者たる両氏が、このような新しい観点を積極的に展開しようとしている事から学ぶことはきわめて多かったことをまず明言しておきたい。それにも関わらず、後輩世代にあたる筆者などが、何の対案も出さずに、旧来の議論の枠に留まった上述のような「批判」を展開することには忤怩たるものがある。そもそも両氏の問題提

起の全貌を十全に理解していない恐れもある以上、その想いは強い。しかしながら、思想史学や歴史学にとつて、本テーマが、今後いつそう重要になってくるだろうことは間違いない事を確信しているがゆえ、そしてこのような積極的な議論を次々と展開させていく営為には、大いに共感するがゆえ、敢えて妄言を連ねた次第である。

(千葉大学准教授)